慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代日本語における名詞化機能を持つ和語接尾辞に関する研究 : 「さ」と「み」を中心に
Sub Title	
Author	張, 婧婷
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2022
Jtitle	日本語と日本語教育 No.50 (2022. 3) ,p.117- 117
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	刊行50周年 大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20220300-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』50：117（2022.3）

〔大学院文学研究科修士論文〕

現代日本語における名詞化機能を持つ和語接尾辞に関する研究
―「さ」と「み」を中心に―

張　婧婷

現代日本語の語構成研究において、一般に和語系の接尾辞は造語力が弱いものが多く、造語力の強い漢語系接尾辞の活用が多く見られると言われている。しかし、和語系名詞化接尾辞でも、「さ」はほとんどの形容詞、形容動詞、一部の名詞、副詞、動詞、助動詞などにつくことができると先行研究で論じられており、造語力は必ずしも弱くない。また、「さ」と同様に名詞化する機能をもった接尾辞「み」との対比も先行研究では言及が多い。

本論文では、このような「さ」と「み」の機能を再検討し、さらに、新たな用法のみえる「み」派生名詞について、新しい意味用法を分析するものである。

本論文は全 3 章で構成されており、各章の概要は次の通りである。

第 1 章では、現代日本語において接尾辞はどのような存在であるか、和語接尾辞にはどのようなものがあるかを把握するために、先行文献を紹介した。次に、本文の考察対象となる接尾辞「さ」と「み」について、機能、接続制限及び生産性と意味用法の視点に立った先行研究を確認しながら、論点を整理した。第 2 章では、まず『新明解国語辞典 第 7 版』（2012）『明鏡国語辞典 第 2 版』（2011）『三省堂国語辞典 第 7 版』（2014）『新選国語辞典 第 9 版』（2011）という 4 点の小型国語辞典を使って、「さ」と「み」の語釈を抽出し、国語辞典における記述について比較検討した。次に、『日本国語大辞典』を搭載しているジャパンナレッジで接尾語「さ」を検索して、「さ」が付きうる現代語の和語形容詞についてまとめた。また、語例を補うために『逆引き広辞苑 第五版対応』(1999)、太田聡（2017）、森田良行（1981）、清水邦子（1978）で挙げられた用例を参照し、「み」が付きうる形容を採集した。その結果「さ」の付きうる和語形容詞は総計 247 語、「み」の付きうる和語形容詞は総計 47 語が得られた。そして、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を利用し、前述のようにまとめた形容詞のうち、「さ」と「み」の両方に結合してできた派生名詞を取り上げ、「色彩・味覚・人の感覚や感情・ものの形や量・ものの感覚や質・人の性格や性質・その他」といった意味分野によるグループ分けをし、各グループの特徴を考察した。第 3 章では、Twitter における新しい「み」の用法について論じた宇野和（2005）、水野みのり（2017）、田中幸奈（2020）の先行研究を参照しながら、最近新たに出現してきた「み」の用法について考察した。その結果、名詞・固有名詞と結合する「み」は「特性を備える、雰囲気がする」という意味を表し、動詞と結合する「み」については言葉遊びや文脈ごとの解釈が可能で、「み」の機能というよりも、言語外の要素によるものであることがわかった。助動詞と結合する「み」は、そのほとんどが希望を表す「たい」との結合であり、形容詞と結合するタイプに類似するものであることがわかった。

従来形容詞・形容動詞しか付き得なかった接尾辞「み」は Twitter などの話し言葉に近い書き込みの場で、前部分となる語基の品詞性の制約もゆるくなり、従来よりも自由度が高くなったことがわかった。